

わたしもご多分に漏れず、仏壇の前で「ああすればよかった、こうすればよかった」と後悔ばかりしている。わたしの息子たちもいずれは後悔するのだろう。昨年の正月に「いいか、墓に布団は掛けられないんだぞ」と説教すると「墓に布団を掛ける人なんかいるわけがないじゃない」と次男坊源紀がいった。ピンゴである。もっと意味を説明したかったが限界を感じてやめた。

その次男坊源紀は近在の代々が多摩の家の一人娘を嫁にした。岡部の姓が増えるのは悪いことではない。嫁の父親は福島生まれだそうである。警察官であつたそうだ。警察官は、鹿児島と福島の人が多い。「戊辰戦争」は形を変えて続いているの

聞いている。わたしの演劇も1回は見に来てくれたが、それからはどんなに誘つても足を運んでくれない。わたしの演劇には巡査の保造というおっちょこちよいの警官が登場する。「おいは松浦のダーティーハリーぞ」。それが嫌だったのかもしれない。

か若乃花の相撲中継が流れていた。どちらも先代か先々代であった。まだ各家にはテレビがなかった時代である。「もはや戦後ではない」「雪どけ」といった言葉が流行っていた。「宇宙の果てにたどり着いたとしても、その先にはなんのあるとじゃろ

ガイが飛び出した。マテガイはしょうゆでゆでて食卓を飾った。バケツいっぱいポタを拾った。ポタで風呂を沸かすのである。母は茶道や花道の道具に金をかけていたが、普段はけちであつた。風呂の水も井戸でくんでバケツで運ばされた。

空想した少年時代

いつ頃まで、空想にふけた時代があつたのだろうか。映画を見る年頃になると、東京を空想するようになっていた。シネ

かもしれない。嫁の家に入ったのである。この人と飲む酒はうまい。9人きょうだいの末っ子だといつていた。飲むほどに福島なまりが強くなる。そして、生まれ故郷の家やきょうだいの話を懐かしそうにする。横で次男坊源紀もうれしそうに笑つて

「宇宙の果てにはなにがあるのだろう」。少年時代、そんなことばかり考えていた。標準語で考えたわけではない。「なん

か」とけない謎であつた。「永遠じゃるか」。家に帰るまでが空想にふける時間であつた。

家に帰ると母は磯でポタ拾いを命じた。石炭のくずがポタである。また炭鉱があつた時代で、そこにポタ山があつた。磯

どこかの家のラジオからは朝潮で小さな穴に塩を落とすとマテ

ある。また炭鉱があつた時代で、そこにポタ山があつた。磯

マスコープ総天然色のスクリーンはしゃれたファッションの男と女であふれていた。銀座のネオンが華やかであつた。テレビの時代になり、三池争議やラグビーの新日鉄釜石を知つた。「と

にかく東京へ」が本音であつた。